

宗教改革期アントウェルペンの出版業者

－『プランタン工房出版目録』から－

本間 美奈*

はじめに

16世紀の宗教改革において印刷・出版業が果たした役割については多くの研究がなされてきた¹。しかし、改革思想の普及や思想家たちのネットワーク形成に印刷業がどのように関わったかが明らかにされる反面、当の印刷業者が、宗教改革や、それに起因する政治的変動にどのように対処したかについては、史料上の制約もあってまだ検討すべき部分が残されている。本稿は、16世紀のヨーロッパにおいて印刷業が繁栄した有数の都市のひとつであるアントウェルペンをとりあげ、この都市のクリストフ・プランタンの印刷工房を具体例とし、出版界が変化する政治状況にどのように対応したのかを考察しようとするものである。明治大学図書館所蔵の

*ほんま・みな／明治大学文学研究科博士後期課程／史学専攻(西洋史)

¹L. フェーブル, H.J. マルタン、長谷川輝夫ほか訳『書物の出現』上下、ちくま学芸文庫、1998年；E. アイゼンステイン、別宮貞徳監訳『印刷革命』、みすず書房、1987年；森田安一『ルターの首引き猫－木版画で読む宗教改革』、山川出版社、1993年；Musée du livre, *Histoire du livre et de l'imprimerie en Belgique des origines à nos jours*. 3ème partie, Bruxelles, 1924-25；De Nave, Fr., *La Réforme et l'imprimerie à Anvers*, *Bulletin de la Société d'histoire du protestantisme belge*, 10/3 (1985), pp.85-94；Gilmont, J.-F.(ed.), *The Reformation and the Book*, Aldershot, 1988.

『プランタン工房出版目録』²と『書簡集』³は、プランタン工房の出版活動を捉えるための最も重要な史料である。

プランタンは1550年にフランスからアントウェルペンに移住し、1555年に印刷工房を設立した。そして1555年から89年の間に、アントウェルペンとレイデンの工房から、約2000点(200万冊)⁴、一枚刷りの印刷物を加えると約2500点もの印刷物を出版した。これは当時の印刷工房における発行部数の水準をはるかに超える数であり、産業革命によって印刷業界に機械動力が導入されるまでは、一人の人間が出版できる分量としてこれを超える工房は現れていない⁵。それと同時に、プランタン工房の出版物の質の高さと取引の範囲の広さも際立っていた。彼の工房は当時の最高水準の印刷技術を誇り、彼の情報収集力や企画力はアントウェルペンの印刷業界を牽引したのである。当時、外交官として低地地方を訪れ、1567年に『全低地地方の記録』*Descrittione di tutti i Paesi Bassi*⁶を著したフィレンツェ人R. グイッチャルディーニは、アントウェルペンの項でプランタン工房に言及し、「この‘ミューズ’の家では、印刷の仕事や関連する作業に、毎日、この国の金にして300フロリン以上もの金を使っている」⁷と驚きの目を向けている。

²Voet & Grisolle, *The Plantin Press, 1555-1589. A Bibliography of the Works Printed by Christopher Plantin at Antwerp & Leiden*, 6vols, Amsterdam, 1980-82 (以下 *Plantin Press.*、書籍番号を付す。尚、出版年が[1556年]と、かつこの内に挿入されていれば、[1556年出版と推定]されていることを表す)。プランタンの出版物については、本稿末尾の「出版分類表」を参照されたい。図書館請求記号・025/125//D

³Rooses, M., *Correspondance de Christophe Plantin* (8vols, reprinted by KRAUS REPRINT, Liechtenstein, 1968), Antwerpen, 1883 (以下、*Corr.*)。尚、同書簡集の補遺 Van Durme, M., *Supplément à la correspondance de Christophe Plantin*, Anvers, 1995 も使用した (以下、*Suppl. Corr.*)。図書館請求記号・023/143//D

⁴1点あたりの平均出版部数を1000冊として計算した場合の概数。尚、プランタン工房における出版部数については、Voet, L., *L'offre: diversification de la production, tirages, prix des livres. Le cas de l' "Officina Plantiniana" à Anvers (1555-1589)*, in: *Produzione e commercio della carta e del libro secc. XIII-XVIII*, a cura di S. Cavaciocchi, Firenze, 1992, pp.565-582.

⁵Voet, L., *The Golden Compasses. A History & Evaluation of the Printing & Publishing of the Officina Plantiniana at Antwerp*, v.1, p.83.

⁶初版は1567年に、アントウェルペンのW. シルヴィウスの工房から出版されたが、1581年に改訂版がプランタン工房から出され(*Plantin Press.*, 1277)、版を重ねた(*Ibid.*, 1278: 1582年、1279: 1582年、1280: 1588年)。

⁷Verniers, L. et al., *Lectures Historiques. Histoire de Belgique*, t.2, Bruxelles, 1936, pp.139-140.

1 国際的書籍取引とプランタン工房

まず、プランタンの大規模な印刷活動の背景を探ってみることとする。アントウェルペンには16世紀中葉のベルギーにおいて印刷業者を最も多く集めており、その数は222人を数えた。この時期の大学都市レウヴェンの印刷業者が47人、ヘント29人、ブルッヘ19人、そして首都ブリュッセルでは15人にとどまることから、アントウェルペン出版業界の大きさが測れよう⁸。国際商業都市として有利な条件を具えていたアントウェルペンでは、出版業者は輸出向けの書籍印刷に力を注いでいた。ヘントではその出版点数417点のうち317点が、ブリュッセルでも366点のうち326点が勅令の印刷であるように、地域の行政文書に限定される性格をもっていたのに対し、アントウェルペン出版の書籍の多くが広くヨーロッパ市場を対象としていた⁹。アントウェルペンのこのような傾向は出版に限られたものではなく、絵画市場にも指摘できることであった¹⁰。この都市は、商業網を利用し、資材・人材・財源を調達できる恵まれた環境にあったことから、書籍・絵画・版画・祭壇などの工芸品を自都市の有力産業とすることができたのである。

国際的な規模で書籍を販売しようとするアントウェルペンの姿勢は、書物のデザイン面への配慮にも現れている。アントウェルペン出版の書籍の体裁は、16世紀に入ると徐々にゴシック様式からルネサンス的な意匠に変っていき、この世紀後半にその傾向はますます強まった。フランス出身のプランタンは、ゴシック体活字を洗練度の低いものとして使用せず、フランスから活字を購入していた。洗練されたフランス活字がアントウェルペンに紹介されてゆき、やがてアントウェルペンのみならずフランドル都市の職人も、この種の活字を鋳造することとなった¹¹。アントウェルペン

⁸Cockx-Indestege & Glorieux, *Belgica Typographica 1541-1600. Catalogus librorum impressorum ab anno MDXLI ad annum MDC in regionibus quae nunc regi Belgarum partes sunt*. 4vols, Nieuwkoop, 1968-94.

⁹Voet, L., *De typografische bedrijvigheid te Antwerpen in de 16de eeuw*, in: Couvreur, W.(ed.), *Antwerpen in de XVIde eeuw*, Antwerpen, 1975, p.237.

¹⁰Vermeulen, F., *Marketing Paintings in Sixteenth-Century Antwerp : Demand for Art and the Role of the Panden*, in: Stabel, Blondé & Greve(eds.), *International Trade in the Low Countries (14th-16th Centuries) Merchants, Organisation, Infrastructure*, Leuven, 2000, p.193.

¹¹Voet, op.cit., p.237.

は活字の製作においても重要な役割を担い、長い間、この都市の鑄造活字が多くこの都市で使用され続けた。

ちょうどこの時期にアントウェルペンでは、挿画として銅版画が利用されるようになり、これが画像による情報伝達の効果を上げることになった。版画には、木版と銅版の2種類の手法があるが、それまでは書籍挿画として専ら木版が使用され、銅版画は一枚画として購入されていた。木版は凸版であり、活字と一緒に組んで同時に刷ることが可能だが、銅版は凹版であるため本と別刷にせざるを得ず、このことが印刷職人に特別の作業を要求した上、印刷の速度が落ちたからである。銅版の書籍への使用は、技術的・金銭的困難を伴ったが、銅版には木版では不可能なニュアンスと微妙な明暗を出すという利点があった。プランタンは、銅版画を挿画として使用した最初の印刷業者のひとりであった¹²。彼は、ヒエロニムス・コックやその工房で働く芸術家と日常的に交流していたから、自分が刊行する特定の書物には銅版刷りの図版を添える、という方針を早くから取り入れ、ペーテル・ファン・デン・ボルフト、ホイス兄弟、ウィーリクス兄弟など、アントウェルペン派の版画家に作品を依頼した¹³。1566年、プランタンは、ヴェサリウスとヴァルヴェルダの医学論文『図説人体解剖学』*Vivae imagines partium corporis humani*¹⁴に42枚の銅版画を載せて出版した。これが成功を収めたことにより、アントウェルペンの印刷業者に留まらず、他国の出版業者も銅版を利用するようになった。

このようにアントウェルペンでは輸出を視野に入れた書籍の作成が行なわれていたが、ここでプランタン工房の1566年における出荷先と販売金額を見てみよう。彼はアントウェルペンの書籍業者に約3,640フロリン分の書籍を渡し、これを含めた低地地方全体の販売総額は、約7,480フロリン(f.)である。他方、外国向け書籍の販売金額総計は、およそ8,850f.に上り、この内訳は、ドイツ4,040f.、フランス3,480f.、イギリス1,060f.、そしてイタリア260f.分になっており、プランタン工房が外国市場に向けた活動を展開している様子が見て取れる¹⁵。この傾向は、スペイン王室と

¹² フェーブル、マルタン、前掲書、上、p.267。

¹³ *Ibid.*

¹⁴ *Plantin Press.*, 2413-2415.

¹⁵ Voet, *The Golden Compasses*. v.2, pp.470-481. ここに顧客納入分は含まれていないが、主に低地地方の顧客に対して約900フロリン分を納めている。このような個人的な取引は、プ

の契約に基づいて膨大な部数の教会用書籍をスペインに納品することになったことから、その後、さらに強まることになる。プランタンの出版物の販路は、ヨーロッパ隣国に留まらず、北部アフリカ¹⁶、さらにスペインを経由して南米にも達している。このような大規模な出版活動は、工房の印刷技術、彼の交渉力や交友関係の広さという個人的な資質に負う部分も大きい¹⁷、特にアントウェルペンがもつ立地条件が強く作用したと言える。

プランタンは、34年間の活動期を通じて、聖書を始めとする宗教書、人文書、法文書、実用書など多種多様な内容の書籍を出版したが(末尾「出版分類表」参照)、人文主義的な著作は、各国の知識人を対象とすることから特に国際的な市場での販売に適していた。16世紀後期の低地地方を代表する人文主義者J. リプシウス¹⁸やA. オルテリウスは、プランタンとの交友関係から、彼らの著書のほとんどをプランタン工房から出版した。リプシウスは、古典や古典学に関する論考を数多く出しているが¹⁹、彼の『恒心論』*De Constantia libri duo*, leiden, 1584²⁰は当時多くの読者を獲得し、1584～1783年の間に、オランダ語、仏語、独語、ポーランド語で約50版を重ねた。地図製作者オルテリウスも、有名な世界地図『世界の舞台』*Theatrum orbis terrarum*, 1579²¹をプランタン工房から出版したが、彼らの著作がヨーロッパ中で受け入れられていく過程に、プランタン工房のもつ取引網の果たした役割は小さくない。

だがなんと言ってもプランタン工房の名声を高めたのは、『多言語対訳聖書』²²である。プランタンは早くから、人文主義の成果の集大成とも言える多言語聖書の印刷を企画していたが、フェリペ2世の秘書であるG.

ランタンの人脈を築く上で重要な役割を果たした。

¹⁶Plantin Press., 649; *Corr.*, I, no.74 (1567年8月5日、ニクラエス宛て)。プランタンは、北部アフリカのユダヤ人コミュニティに向けて「片面印刷の四つ折版ヘブライ語聖書200冊」を送付している。

¹⁷拙稿「宗教改革期アントウェルペンの印刷業をめぐる一考察—プランタン印刷工房を事例に—」『明治大学文学研究論集』第20号(2004年)、pp.129-148を参照。

¹⁸リプシウスはアルバ公の統治を避けてドイツに滞在していたが、1575年に低地地方に戻りレウヴェン大学の、1578年にはレイデン大学の教授になる。

¹⁹Plantin Press., 1530-1566.

²⁰Plantin Press., 1535.

²¹Plantin Press., 1817.

²²Plantin Press., 644, 1568-1573年.

セイヤスの仲介によって、1568年に王の財政援助を受けることに成功した。学術面での顧問として王付き司教アリアス・モンタヌスがプランタン工房に派遣され、5言語(ラテン語、ギリシア語・ヘブライ語・シリア語・カルデア語(アラム語))による聖書8巻(テキスト5巻と、注釈と文法解説・辞書3巻)を印刷することに決定した。カルデア語とシリア語のテキストは、学術的に特に価値の高いものであり²³、多数の人文主義者の協力を得て、1572年に一応の完成をみた。出版部数としては1200部と控えめであるものの、本文ページ数が720万ページにも及ぶこの大事業が、プランタンの学匠出版者としての立場を確かなものとしたのである。

プランタンは、印刷工房を開く際にアントウェルペンを選んだ理由を、ここ以上に印刷出版業に適した土地は他に見出せないからだと述べている²⁴。この言葉を裏付けるように、プランタンは、アントウェルペンのもつ利点を出版活動に最大限に利用した。しかし同時に、彼の活動期は、カルヴィニズムの浸透期、そしてスペインへの反乱期と重なっていた。彼はこの2つの社会情勢の変化に対して、どのような態度で出版活動に臨んでいたのだろうか。次にこの点を考慮してゆくこととする。

2 宗教改革と出版業

アントウェルペンの印刷業者たちは、宗教改革が始まった直後の1520年代から1540年代にかけて、多数のルター派文書を出版し、国内・国外に向けて広めていった。これに対し政府は1529年、禁書印刷を死罪と定めてルター派文書出版取締り、40年代には市内からこうした動きを一掃することに成功した。だが1560年代に入ると、今度はカルヴァン派の伸長に伴って、改革派文書や扇動文書の出版が活発化する。プランタン工房でも1562年、プランタンの留守中に、職人たちがカルヴァン派パンフレット『簡易祈祷書』*Briefve instruction pour prier*²⁵を印刷し、工房が捜査を受け、職人が逮捕されるという事件が起こった。市代官の判断によって、プランタンが法廷に召喚される事態には至らなかったが、プロテスタ

²³Voet, *Golden Compasses*, v.1, p.60.

²⁴*Corr.*, IV, no.566 (1574年10月9日、プランタンから教皇グレゴリウス13世宛て).

²⁵*Plantin Press.*, 1452.

ント文書の印刷を疑われるような出版活動に際しては、印刷業者は常に細心の注意を払わねばならなかった。

出版業者としてのプランタンは宗教改革に対してどのような態度を取っていたのだろうか。彼自身は生涯を通じて、自分がカトリックだと公言しているが、1563年から67年の間、カルヴァン派の出資者たちと工房を共同経営していた。この工房からは、1564年1月のウェルギリウスの作品に始まり、1567年8月に『小教理問答』が出るまでの間に209点が出版されているが、多くが販売しやすい書籍であり、古典、教会用書籍、「エンブレム」²⁶などが目立つ。工房は軌道に乗っていたが、カルヴァン派との共同経営にもかかわらず、この5年間にこの工房からカルヴァン派の文書が印刷されることはなかった²⁷。プランタンも出資者も、あくまでもビジネスとして印刷工房を経営したようである。

ところでこの時期、出版業者は事前に検閲を受けて出版許可を得ねばならなかったが、たとえ規定の検閲手続きを踏んでいても、出版の差し止めが命じられることもあった。1564年プランタンは、注釈付き『詩篇』のフランス語訳 *Pseaumes de David*, 1564年²⁸の検閲を司祭と州議会に依頼し、双方から許可を得て印刷した。だが執政は州議会の尚書に対し、カルヴァン派たちが同書を使用しているという理由から、出版差し止めと焼却処分を命じた²⁹。おそらくこの出版は、プランタンがカルヴァン派に組したからではなく、社会情勢に照らしてこの書物が売れると判断したことによると思われるが、この『詩篇』のジュネーヴ版に記載されていたカルヴァン派マロとド・ベーズの名が、プランタンの版では削除されていることから³⁰、同書印刷の危険性には気づいていたものと思われる。

この事件があったのち、プランタンは方針を変えて、他の都市に職人を送って印刷をさせ、利益をこの職人と分割しようとした。1566年末、プ

²⁶ 題辭 (モットー)、挿絵 (イメージ)、詩文 (エピグラム) からなり、道徳的・哲学的概念を視覚化して説明するもので、1531年にアウクスブルクで刊行されて以後、西ヨーロッパで多数出版された。

²⁷ この時期の出版物については *Plantin Press.*, VI, pp.2458-2463 を参照。

²⁸ *Plantin Press.*, 722. 初版は1562年、クレマン・マロとテオドール・ド・ベーズによってジュネーヴで出版された。カルヴァン派色の濃いものではあるが、カトリックも使用していた (*Plantin Press.*, I, p.396)。

²⁹ *Suppl. Corr.*, no.9 (1564年11月30日、執政マルハレータからフェリペ2世)。

³⁰ *Plantin Press.*, I, p.396.

ランタン工房の印刷人であったオーガステイン・ファン・ハッセルトが³¹、印刷所をヴィアネンに設立した。ヴィアネン領主ヘンドリック・ファン・ブレードウロードは反乱軍の指導者のひとりであったが、反乱陣営の主張を印刷するためにヴィアネンに印刷人を集めており³²、1563年から67年の間に、ローマ教会と政府に敵対的な内容をもつ数多くのパンフレットがヴィアネンで印刷された³³。オーガステインがヴィアネンで印刷した書籍は、プランタンの書簡によって³⁴、『低地地方の出来事に関する真実と弁明』*Vraye narration et Apologie des choses passées au Pays-bas* と³⁵、『信仰をめぐる1566年のアントウェルペンでの諸事件』*Recueil des choses advenues en Anvers, touchant le fait de la Religion, en l'an 1566*³⁶とが知られるが、これは、のちにカルヴァン派体制下でアントウェルペン市長になるマルニクス・ファン・シント・アルデホンデの著作であった³⁷。オーガステインのヴィアネン工房設立が発覚すれば、当然プランタンにも反政府の嫌疑がかかる危険性があった。

では、プランタンは反乱軍に組するようなこうした出版活動への参加を意図していたのであろうか。前述のプランタンの書簡には、オーガステインの仕事からの資金回収について不安が述べられていることから、工房開設に彼が関わったことは疑いない。後述する「愛の家族」の『愛の家族年

³¹ オーガステインは「愛の家族」(後述)のニクラエスの書記として雇われ、プランタン工房で印刷人として訓練を受けていた。カンペンでニクラエスの著作を印刷をしたのち、1564年4月にはアントウェルペンへ来てプランタン工房で働いている。

³² 執政マルハレータはブレードウロードに親書を送り、印刷出版を止めさせようとしたが効果はなかった (Valkema Blouw, P., Augustijn van Hasselt as a printer in Vianen and Wesel, *Quaerendo*, 16 (1986), p.91)。

³³ Valkema Blouw, op.cit., p.100.

³⁴ *Corr.*, I, no.74. 「マルタン氏が書いた写しが、オーガステインへ送られました。しかしそれ以来、この件についても、また、オーガステインの預かりになっていることについても、私は何も聞いていないために、心労に追いつまれています。何故ならば、私は紙・革・インク・運賃や前払いに500フロリン以上も支出したのですから。そしてそのうち、私はApoc.とRec.から部分的に、およそ40フロリンしか回収していないのです。」

³⁵ Cockx-Indestege & Glorieux, *Belgica Typographica 1541-1600. Catalogus librorum impressorum ab anno MDXLI ad annum MDC in regionibus quae nunc regi Belgarum partes sunt*. 4vols, Nieuwkoop, 1968-94, v.1, no.2054.

³⁶ *Ibid.*, v.1, no.4110.

³⁷ 次の2点の印刷もオーガステインに帰せられている。*Remonstrance et Supplication de ceus de l'Eglise reformée de la ville de Valencenes* (Belgica Typographica, v.1, no.4132); *Déclaration sommaire de fait de ceus de la ville Vallencienne* (Belgica Typographica, v.1, no.825). 両書とも牧師ギ・ド・ブレの著書で、前者はカルヴィニストのヴァランシエンヌ攻防の様を描く。

代記』にも、プランタンとオーガステインが相談しヴィアネンに工房を建てたが、反乱軍の敗北により事業が頓挫したことが記されている³⁸。

他方で、オーガステインからプランタンに宛てた 1567 年 3 月の書簡には、当初の両者の合意では、カンペンに工房を設立するはずであったが、オーガステインが予定を変更してヴィアネンに赴いたとされている³⁹。立腹したプランタンに対し、オーガステインは、プランタンの出資分の返済を約束し、怒りを収めてくれるよう懇願している。おそらく、プランタンは、1564 年にアントウェルペンで『詩篇』印刷を断念させられた経験から、聖書に関する需要が高まっている情勢を利用し、どこか他の都市でこの種の書籍の出版を目論んだのであり、あえてヴィアネンという反乱軍の土地に工房を立てるつもりはなかったと思われる⁴⁰。オーガステインの言う通りカンペンといった他都市において、事業拡大の機会を増やしたいと考えていたと捉えるべきであろう。結局、オーガステインが政府によるヴィアネン掃討を逃れたため、この件が表沙汰になることはなかった。

1566 年の政府側の譲歩によってプロテスタントが勢い付き、アントウェルペンでも聖像破壊が行なわれ緊迫した状況になると、政府は 1567 年以降、一転して弾圧政策を取り始める。プランタンの出資者たちは取締りを逃れて亡命し、工房の共同経営は解散された。ここで興味深いのは、残されたプランタンが、ローマカトリック教会から非常に大きな仕事を受けることに成功したことである。カトリック教会はトレント公会議において、礼拝に使用する教会用書籍を改訂することに決定し、1568 年 7 月 9 日、教皇ピウス 5 世は、改訂した聖務日課書の印刷独占権をローマの印刷業者マ

³⁸ 愛の家族年代記によれば、「クリストフェルはオーガステインに印刷工房を任せ、それをホルントのヴィアネンに建て、そこで領主ブレドウロードの庇護の下で(彼は著名かつ傑出した人々の一人であり、カトリック教会に対抗する準備をしていた)、同じ恩典を受けながら、彼の党派の本と、多くのラテン語とドイツ語文書を印刷する」ことを企画していたと記されている (*Suppl. Corr.*, 246)。

³⁹ *Corr.*, I, no.26. 「旅の途中で、そこ [ヴィアネン] が、より近いという忠告が私を思い留まらせました。私が印刷する書籍の買い上げが約束されたのです。」「あなたは、私がヴィアネンに落ちついた事を大変激しく怒っています。そして、私が不誠実にあなたを扱ったと言っています、私はカンペンに行くつもりだと言っていましたから。」

⁴⁰ プランタンの関与を主張するものとして Bouchery, *Aanteekeningen betreffende Christoffel Plantin's houding op godsdienstig en politiek gebied, De Gulden Passer*, 18(1940), p.113; Voet.op.cit., p.53、彼の関与を否定し、カンペンでの出版に関する仮説を示した Valkema Blouw, op.cit., pp.91-96 を参照。

ヌティウスに、1570年7月14日にはミサ典書の改訂版の印刷独占権を同じくローマの印刷業者ファレッティに付与した⁴¹。プランタンは、工房の顧客であったグランヴェル枢機卿の助力を得て、1567年11月19日には、マヌティウスとの同意によって、低地地方での聖務日課書の印刷独占権を手に入れた⁴²。この日付が、教皇によってマヌティウスに独占販売権を認可するよりも半年以上も早いことが注目される。つまり、この独占権の取得に際しては、教皇の認可以前に、印刷業者の人選についての根回しが行なわれたとみられる。このような場合、自分を推してくれる有力な庇護者をもつことは、印刷業者の仕事の受注を左右する非常に重要な要素であった。この独占権取得を皮切りに、ミサ典書、時■書等の改訂版の特許もプランタンが取得した。また、フェリペ2世がスペイン用の教会書籍の出版許可を教皇から得ると、1571年2月1日、前述のモンタヌスの助力によって、プランタンが、スペインと海外領土の聖務日課書とミサ典書の独占権を得ることとなった。1571年から1576年の間に、プランタンはスペイン王に対し、これらの教会用書籍を総額100,000フロリン分供給している⁴³。カルヴァン派との共同経営の事実、ヴィアネン工房の件など、プランタンには1567年に政府の弾圧を恐れねばならない理由があったが、彼はまさにこの時点で、カトリックのための大きな仕事を受注することで工房を更に発展させたのである。

1566年までのプランタンは、カルヴァン派の聖書への関心の高さを計算して、需要の見込める聖書の出版を企画していたように見える⁴⁴。これはプランタンがカルヴァン派に組していたからではなく、あくまで書籍の販売が目的であった。実際、1567年に政府がアントウェルペンの騒擾を収拾すると、プランタンは、「陛下の御意志と公共の安寧に反して、敢えて新奇

⁴¹Voet, *Golden Compasses*, v.1, p.65.

⁴²聖務日課書を刷り上りの10分の1渡すか、それに相当する金額を払うという条件である (*Ibid.*).

⁴³Voet, *Golden Compasses*., v.2, p.401.

⁴⁴Cf. *Plantin Press*., 2129bis, *Instruction chrestienne*, 1558年; 2130, *Idem*, 1562年。この書はピエール・ド・ラヴィリアンなる人物による聖書解釈書であり、プランタンが出版したものだが、執政マルハレータは1563年6月26日の書簡で、この検閲済の著作印刷に関してプランタンに弁明を求めた。ラヴィリアンが偽名であり、おそらく後にカルヴァン派牧師になったジャン・タッフエンではないかと推測されたことが、政府の疑惑を招いたと思われる。だがタッフエンは、亡命前はグランヴェル枢機卿の図書係だったことから、政府は問題の表面化を避けたと推測され、それ以上の追求はなかったようである。

な事を導入しようとする厚かましい人々の集団から、この高貴なる都市が大いに浄化されましたことを見て、私は嬉しく思います」⁴⁵と、王の秘書官セイヤスに述べている。そしてプランタンは、スペイン王の仕事を受注したことを通じて、1569年以降、『禁書目録』⁴⁶の印刷も委託された。また翌1570年には、低地地方の印刷業者の技能を判定する「印刷職検定官」に任命され、6月10日にスペイン国王公認の印刷業者 Architypographus Regius に指名された。このように、プランタンはカトリック側の仕事を、言わば一手に引き受けるような機会に恵まれた。安定した状態で改革運動に関わりなく多くの仕事を得ることが、プランタンの最も望んだ状況であったと言える。

しかし、このようにカルヴァン派の聖書に対する需要を利用しようとした以外には、プランタンが基本的にはカトリック側の書物しか印刷しなかったかと言えば、そういうわけではなかった。プランタンの出版活動について興味深い点は、神秘主義セクトの著作を匿名で印刷し続けた点である。彼は、工房を開いた翌年1556年から1562年の間にかけて、神秘主義セクト「愛の家族」の指導者ヘンドリック・ニクラエス⁴⁷の著作『正義の鏡』*Den spiegel der gerechticheit* [1556年]⁴⁸をはじめ、数点を匿名で出版した⁴⁹。ニクラエスの態度をめぐって1573年頃セクトが分裂した後は、プランタンは、「愛の家族」の後継者であるヘンドリック・バレフェルトと

⁴⁵ Corr. I., no.28 (1567年4月16日、スペイン王秘書官セイヤス宛)。

⁴⁶ *Plantin Press.*, 1440-1446. これには、1440番の *Librorum prohibitorum index*, 1569に始まり、トリエント公会議の決定に基づき、アルバ公の命で編纂された禁書目録の1444番、また本全体ではなく著作の一部を禁じ、削除すべき箇所を記した『削除目録』である1446番 *Index expurgatorius librorum*, 1571などが含まれる。

⁴⁷ 「愛の家族」はアントウェルペンを越えて信奉者をもっていた。Cf: Hamilton, A., *The Family of Love in Antwerp, Bijdragen tot de geschiedenis*, 70 (1987), pp.87-96; Idem, *Cronica, Ordo sacerdotis, Acta HN. Three texts on the Family of Love. Documenta Anabaptistica Neerlandica*, 6, Leiden, 1988.

⁴⁸ *Plantin Press.*, 1731; 1732 [1562年]。『愛の家族年代記』には、「この時期にプランタンは、ニクラエスが彼に支払ったお金で、『正義の鏡』と小作品をアントウェルペンで印刷しようとしていた (*Suppl. Corr.*, no.246)」と記されている。また別の史料として、カルヴァン派牧師 A. サラヴィアが、自分とリプシウスとプランタンの会話について言及した、カンタベリー大司教宛て書簡でも、「プランタンがニクラエスの『正義の鏡』と同著者の小作品を数点作成した」とある (Van Crombruggen, H., *Een brief van Adriaan Saravia over Lipsius en 'Het Huis der Liefde'*, *De Gulden Passer*, 28(1950), p.110)。

⁴⁹ *Plantin Press.*, 1733-1746.

交友を持ち、1581年にバレフェルトの著作『野の宝の証言の書』⁵⁰、1583年には『手紙の書』⁵¹を印刷した。ニクラエスもバレフェルトも、もとは再洗礼派と深い関係をもっており、アントウェルペンでも再洗礼派が厳しく弾圧されたことを考えあわせれば、プランタンはこれらの著作を当然、匿名で印刷せざるを得なかった。プランタンの信仰的立場や神秘主義への傾倒について本稿では詳細に立ち入ることはできないが⁵²、彼ら神秘主義思想家と生涯にわたって親交を持ち続けたことを指摘しておきたい。

80年代に入ると、プランタンは神秘主義者の著作印刷に更に慎重さを見せるようになり、バレフェルトの著作の出版は、当初はプランタンの望むところではなかった。プランタンは、バレフェルトに対し、「私は、そこに含まれた教義が、私が目にし得た、個人の名で印刷されたもの全てと比べても、非常に抜きん出ていると思ったにもかかわらず..... 前述の本の印刷につきましては、政治的規則に従って、印刷することは出来ません」⁵³と拒否している。「... 神の国の平和と平穏は、ある主張や書物によって得られた考えに基づく議論や反駁からは生じないのです」⁵⁴と述べ、バレフェルトとの交流と出版活動との間に一線を引いている。これに対してバレフェルトはプランタンへの返信の中で、人々の信仰心の低下を憂い、『野の宝の証言の書』と『手紙の書』の印刷の必要を説いた⁵⁵。結局、プランタンは、この著作を出版したが、これは個人的にバレフェルトの懇願を受け入れたものと言えるだろう。

バレフェルトの著作が出版された1581年、プランタンは、1555年の工房開設時に作った工房規則を改訂した⁵⁶。罰金額が最も高い禁止事項は、工房内で宗教に関する話をした場合であり、宗教に関する会話は厳しく禁じられ、この種の問題に及んだ時は、すぐにプランタンに知らされねばな

⁵⁰Plantin Press., 627, *Het boek der Ghetuygenissen vanden verborghen Acker-schat* [1581 年]; 628[仏訳], *Le livre des Testimoignes du Thrésor au champ* [1581 年].

⁵¹Plantin Press., 629, *Les Sendt-brieven wt yverighe herten, ende wt afvoorderinghe, schriftelijck aen de Lief-hebbers der Waerheyt, deur den wvloedt van den Gheest des eenwesighen Leuens wtghegheven* [1583 年]; 630[仏訳], *Epistres ou Lettres missives, escrites par l'effluxion d'esprit de la vie uniforme: Traduites du flameng* [1583 年].

⁵²前掲拙稿、特に 140 頁～143 頁参照。

⁵³Corr., VI, no.834 (1579 年 8 月、バレフェルト宛てと推定).

⁵⁴*Ibid.*

⁵⁵Corr., VI, no.893 (バレフェルトからの返信).

⁵⁶Sabbe, M., *Christophe Plantin et ses contemporains*, in: *Musée du livre, op.cit.*, pp.121-123.

らなかった。このことは、プランタンが、宗教が絡む事態に早くから細心の注意を払っていたことを示唆していよう。この時プランタンは、この罰金額を6スタイファーから1フラマン・ポンドに引き上げ⁵⁷、工房の全員に対し、この規則に同意するよう署名を求めたが⁵⁸、この背景には、バレフェルトの著作の印刷が懸念事項として存在していたという推測も可能であろう。

プランタンは、自己を敬虔な者と自負していたが⁵⁹、現実世界の信仰上の争いに対しては、関与することはなかった。前述のバレフェルト宛ての書簡でも、プランタンが、宗教をめぐる議論が平和を乱すことを無意味と見なし、自己の信仰を絶対的なものと主張して他者を議論によって屈服させようとする風潮を否定していることが窺われる。プランタンの印刷をめぐる外的状況への対応は、こうした個人的な信仰をめぐる態度とは別個の問題として、あくまで、印刷業者としての現実的な利害に基づいたものではないだろうか。

3 低地地方の反乱と出版業

スペイン政府の圧政に対して、低地地方のカトリックとプロテスタントは、ヘントの和平(1576年)において、団結してスペインに抵抗する事を協約した。カルヴァン派がひとつの勢力に成長した状況下で、カルヴァンの著作、カルヴァン派の説教、政治・宗教的状况についてのパンフレットが多数出版された。低地地方の反乱は、プランタンとフェリペ2世の間の受注関係にも影響を及した。1573年から1576年には、『多言語対訳聖書』の印刷が最終段階に入り、改訂版教会用書籍もスペインに向けて送られていた。だが戦時下の工房は、略奪による被害にあい、スペイン王の支払い停止による負債を抱え込んだ。その危機を開くために、1578年にプランタンがとった手段は、新執政オーストリア大公マティアス⁶⁰、アント

⁵⁷1 フラマン・ポンドは6フロリンで、ほぼ2週間分の職人の賃金に相当する (Voet, *Golden Compasses.*, v.1, p.101)。

⁵⁸*Ibid.*

⁵⁹Van Crombruggen, op. cit., p.114 の書簡参照。

⁶⁰*Corr.*, VI, no.816 (1578 年末日、マティアス大公宛て)。この時、ヒエロニムスの著作が大公に献呈された (*Plantin Press.*, 1334 : *Epistolae et libri contra haereticos*, [ed. Marianus

ウェルペン市参事会⁶¹、全国議会⁶²といった上位権力に対して庇護を求め、仕事の用命を請願することであった。プランタンは、1578 年以降「全国議会の印刷人」となったが、その後も「王の印刷人」の銘をも使用していた。つまりこの時期プランタンは2つの政治権力の印刷人であったわけである。

だがプランタンを公認印刷人と認定した全国議会や都市参事会との関係は、スペイン側を攻撃する文書の印刷をプランタンに求めることとなった。プランタンはこのような文書の印刷過程で、極めて攻撃的な文書には自分の名を載せることを避け、工房の校正係であり義理の息子のカルヴァン派ラフレンジウスの名で出版している。この種の出版物としてラス・カサスの『東インドで犯されたスペイン人の圧政と残虐』*Tyrannies et cruautéz des Espagnols, perpetrées és Indes Occidentales* (1579 年)⁶³が挙げられるが、この書籍には、低地地方の住民をスペインという専制国家に対する反抗へと奮起させる内容の序文が載っていた。彼はスペイン側に、あくまでも政治状況の変化の中で、自分の公的な立場としては現時点での支配層に従順でなければならない、と訴えている⁶⁴。スペイン王の仕事から資金を回収できていない状況下で、スペイン・カトリックとの関係を悪化させるわけにはいかなかった。

だが 1581 年にユトレヒト同盟がフェリペ 2 世の廃位宣言を行うと、プランタンは「王の印刷人」の銘の使用をやめ、「全国議会の印刷人」のみを使用するようになり、全国議会が君主としてフランス王弟アンジュー公フランソワを迎えると、1582 年には公に対し「公の印刷人」たることを請

Victorius], 1578.)

⁶¹Corr., VI, no.814 (1578 年 [10 月]). プランタンが都市の布告を全て印刷するかわりに、市参事会は年金 300fl. を出す。この場合、プランタンは自分が印刷した全書籍の一部と、自分が入手した全書籍の一部を、市参事会に納めることとなった。

⁶²Corr., V, no.793 (1578 年 5 月 17 日、全国議会からプランタンへ)。全国議会の布告の印刷独占権を得るかわりに、「何かが公刊される度ごとに、プランタン氏は、それを議会に 300 部無料で渡」し、「それ以上は、一枚当たり 1 リアール [1 スタイファール] で支払われる」という条件である (Slenk, H. J., Christopher Plantin and The States General, *De Gulden Passer*, 43(1965), pp.248-264.

⁶³Plantin Press., 926. 同書の出版許可には「上位者の命令により」とある。初版は 1552 年にセビリアで出版された『インディアスの破壊についての簡素な報告』。

⁶⁴Corr., V, no. 801 (1578 年 7 月、モンタヌス宛て)。「その間、自分の婿達は私の名において、生活の方法を得るために、船の舵を取っている人々から命じられたものを可能な限り、印刷することを強いられました」と弁解している。

願している⁶⁵。「公の印刷人」になったプランタンにとって、書籍を誰に献呈するかについても配慮が必要であった。1579年出版のオルテリウスの『世界の舞台』は、フェリペ2世に献呈されており、翌1580年のドイツ語版も同様であった⁶⁶。だが、フェリペ王が廃位を宣言された1581年の仏版では、このフェリペへの献呈の辞は削除され、代わりにキケロから引用文が挿入された⁶⁷。この例からも、印刷業者としてのプランタンの社会情勢への適応を見て取れよう。

低地地方の政治・宗教的混乱を背景に多数の者が亡命を図る中、プランタンにアントウェルペンを離れる機会がなかったわけではない。1577年にフランス王アンリ3世はプランタンをパリに招き、「王の印刷人」になるよう勧め⁶⁸、1581年にはサヴォワ公が自分の公認印刷人になるようにと申し出た⁶⁹。だが結局プランタンはアントウェルペンを離れなかった。他国へ移った場合、スペイン王の事業からの資金回収が不可能となることが懸念としてあったであろう。

政治権力がこのように変転する中であって、プランタンの出版物にはスペイン体制下では見られなかった要素が生じた。プランタン工房の中心的な出版分野である人文主義的作品や、古典、聖書や実用書などに関しては、一貫して出版されている。大きな変化が見られるのは、パンフレットの出版量が大幅に増大した点である。確かにプランタンはスペイン政府体制下でも、パンフレットを刷っているが数点に限られており⁷⁰、改訂版教会用書籍を大量に印刷していた1574～76年にかけての間には、パンフレットは全く刷られなかった。だが、1580年には一転して89点ものパンフレットが印刷され、81年87点、82年100点、83年64点、84年には94点と、毎年ほぼ同じ分量でパンフレットが印刷されている。これらのパンフレッ

⁶⁵ *Corr.*, VII, no.983 (1582年4月17日)。

⁶⁶ *Plantin Press.*, 1818。

⁶⁷ *Plantin Press.*, 1819。1588年のスペイン語版になると、フェリペ王への献呈辞が再び載せられている。

⁶⁸ *Corr.*, V, no.775 (1577年9月6日、モンタヌスへ)。

⁶⁹ *Corr.*, VII, no. 968 (1581年12月19日、シャルル・パスカルよりプランタンへ)。

⁷⁰ スペイン体制下において印刷されたパンフレットは時事的な内容をもつ。*Plantin Press.*, 1848 は、1566～67年のカルヴァン派と執政マルハレータの交渉に関する書簡であり、*Plantin Press.*, 1868 は、1572年にフランスで起こったサン・バルテルミーの虐殺に対する弁明のパンフレットで、どちらのパンフレットも政府の命令で出版された。

トは、ほぼ全てが全国議会の委託によるものであった⁷¹。

パンフレットの内容を見てみよう。時事的な内容をもつもの、例えば1577年印刷の「永久令」や⁷²、1579年皇帝臨席のもとケルンで開かれた、フェリペ王と全国議会の和平会議に関する報告⁷³を始めとする、一連の時事的な内容をもつパンフレットには、プランタンの名が記載されている場合が多く、1582年印刷のオラニエ公暗殺に関する時事パンフレットにも⁷⁴、プランタン工房の名が記されている。だが他方で、1580年に印刷された、プランタンのパトロンであるグランヴェル枢機卿に対する非難文書『グランヴィル枢機卿とフォンクの長官の没収書簡』*Afgheworpene Brieven vanden Cardinael van Granvelle ende vanden president Fonck* と、その仏訳 *Diverses lettres interceptés du cardinal de Granvelle.....* 1580⁷⁵ には、プランタンは自分の名を載せず、工房の職人の名を借りて載せており、こうした態度はオラニエ公側によるパンフレットにも同様に見られた⁷⁶。つまりプランタンはパンフレットの内容によって、自分の名を明示するか否かを判断したのであった。とはいえ、反乱側の主張を表したパンフレットであっても、自分の名を出さざるを得ない場合もあったようである。1581年アンジュー公が、フェリペ2世に代わって君主に就くことを表明したパンフレットなどがこの種のものであったが⁷⁷、こうした場合プランタンは、これが上位権力からの命令であることを理由にしている⁷⁸。

このようにプランタンは反乱体制へもうまく対応していたが、この時期スペイン側に属する人物の著作出版が皆無になるということはなかった。反乱体制下であっても『多言語対訳聖書』の監修者モンタヌスの著作は、1581年に1点、1583年に3点がプランタンの名において出版されている⁷⁹。モンタヌスはフェリペ2世の聴聞司祭でありカトリック界の要人

⁷¹ パンフレットに関しては、*Plantin Press.*, IV, pp.1747-1806 を参照。

⁷² *Plantin Press.*, 1869.

⁷³ *Plantin Press.*, 1917.

⁷⁴ *Plantin Press.*, 1928.

⁷⁵ *Plantin Press.*, 1914-1916.

⁷⁶ *Plantin Press.*, 1920. *Emanuel-Erneste, Antwerp, N. Spore*, 1580.

⁷⁷ *Plantin Press.*, 1924.

⁷⁸ *Ibid.*; Cf., *Corr.*, VI, 933 (1581年6月17日、ブラーバント州議会からプランタンへ)。

⁷⁹ *Plantin Press.*, 577-590. モンタヌスはこの聖書の注解書 *Humanae salutis monumenta*, [1571, 1581年] の出版が原因で、スペインで異端審問に召喚された。

であるが、1572年に『多言語対訳聖書』が完成してからもプランタンと書簡を交換しており、プランタンにとってモンタヌスは、まず人文主義者であったからであろう。

さて、フェリペ2世の代わりに君主として迎えられたアンジュー公だが、低地地方の既成勢力に対して1583年1月アントウェルペンでクーデターを起こして失敗し、同地から撤退した⁸⁰。不安定な政治情勢が続く中、プランタンは、アントウェルペンの工房を義理の息子たちに任せ、カルヴァン派都市レイデンに行き、レイデン大学のための印刷をすることにした。プランタンは、移住の動機を、この時にレイデン大学教授になっていたリプシウスによる誘いと、自分の健康上の理由としている。だが、スペイン・カトリックの庇護者たちは、このレイデン移住に驚き、彼の真意を質してきた。プランタンは、自分は「ローマ・カトリックであり続け、異端の地レイデンにあっても中立的な著作を印刷する」と約束した⁸¹。しかしここで出版された『ポルトガル王アントニオ1世殿下が、カスティーリア王フェリペに対して王位を奪回するために行なった戦争に関する、真正かつ正当な権利の弁明』*Explanatio veri ac legitimi juris quo serenissimus Lusitaniae rex Antonius ejus nominis primus nititur ad bellum Philippi regi Castellae, pro regni recuperatione inferendum* (Leiden, 1585)⁸²は、ポルトガル王子の庶子であり、一時期ポルトガル王位にあったドン・アントニオが、フェリペに対して行なった王位要求を正当化したものであり、その印刷はスペイン側から見れば明らかに反逆に当たった。プランタンはこの件に関する弁明で、ホラント州議会に強要されたと訴えた⁸³。このようにプランタンの申し開きの常套手段は「強いられた」と主張することであった。実際、プラ

⁸⁰ プランタンは「公の印刷人」のタイトルを記載しなくなる (Voet, *Golden Compasses*., v.1, p.96)。

⁸¹ Hoyoux, J., *Les relations entre Christophe Plantin et Torrentius, évêque d'Anvers*, in : De Nave, F.(ed.), *Liber amicorum Leon Voet, Antwerp*, 1985, p.113.

⁸² *Plantin Press.*, 64. 仏訳は *Ibid.*, 65, 英訳は 66. 全てにプランタンの名前が明記され、出版許可の箇所「上位者の命による」とあり、あくまで命令による出版であることを強調している。

⁸³ *Corr.*, VII, no.1056 (1585年12月21日、セイヤス宛て)。他方で、ドン・アントニオが、「スペイン王を敵と見なし、王の臣下と取引する商人にも攻撃を加える」と宣言した声明書を、1582年と1583年に匿名で印刷していた (*Plantin Press.*, 59[1582年], 60[1582年], 61[1582年], 62[1583年], 63[1583年])。これらは全て匿名出版だった。

ンタンのように、公権力から仕事を独占的に受注する方法によって工房を経営する場合、支配体制が二転三転する体制下では、このような弁明をするほかないであろう。

だが1585年にスペイン軍がアントウェルペンを陥落させたとの報を聞くと、プランタンは直ちに同都市へ戻った。アントウェルペンが再びスペイン支配に戻ったことは、プランタンにとって喜ばしい出来事であった。彼がアントウェルペンに戻ると、新執政パルマ公は彼を呼び、スペイン王がプランタンに負っている金額についての詳細な報告書の提出を求めるなど、好意的に迎えた。プランタンの友人で、アントウェルペン大聖堂の教会参事会員 W. ファン・デル・ステーヘンは、低地地方の異端審問官代表でもあったが、1585年10月にプランタンのカトリック信仰の証明書を発行している⁸⁴。プランタンはアントウェルペンに戻って再び「王の印刷人」となった。1586年10月には、カトリック体制下で刷新された市参事会も、1579年の反乱勢力下での市参事会と同じ条件で、プランタンを「都市の印刷人」として認めた。往年の工房の活況は望むべくもなかったが、プランタンはアントウェルペンで活動を続けていくこととなる。

まとめにかえて

アントウェルペンのプランタン工房を素材として、印刷業者の活動をスペイン支配期と反乱期に分けて考察してきた。ここで注目されることは、宗教的政治的な状況が変動する中であっても、出版物の基層が大きく変化していないことである。そこには自分の信仰と出版活動に一線を画して、事業としての出版を展開しようとする出版業者の姿を見出すことができる。もちろん、政治状況に対しては、為政者が入れ替わる状況に合わせて、印刷物の内容に変化がみられたことも事実である。上位権力から公的に仕事を受注する契約を結んだことから、自分達の敵を攻撃する文書の印刷を、時には公然と、時には暗に求められたからであるが、そこにも巧みに状況に対応する姿勢を見出すことができよう。

⁸⁴Hoyoux, op.cit., pp.109-115.

そして、プランタンの個人的な人間関係に基づく出版の場合は、こうした宗教・政治情勢とは別に行なわれていた。神秘主義セクトの著作印刷などを始めとする、社会情勢に照らして、自分の立場を危険にさらす可能性がある場合には、当然、匿名の出版という手段をとったのである。

宗教改革期の印刷業者は、禁書印刷については死罪を宣告される危険と常に隣り合わせであった。カトリックとプロテスタントのどちらが政治の主導権を握るかによって、印刷業者たちは翻弄され、政治状況が流動的な16世紀の低地地方において工房を維持存続させることには困難を伴った。自分の信仰に基づいて亡命する印刷業者が出る中で、プランタンは、スペイン・カトリックとの関係を良好に保つ一方、低地地方の反乱体制に順応した。そして、カトリック勢力に対して申し開きの出来る範囲で、反乱体制からも利潤を引き出そうと努めたのである。

プランタンは印刷業者としての実利的な態度によって工房を支えていたのであり、彼のこうした処世術は、宗教改革期における出版業者の、ひとつの型を表していると言えよう。

プランタン出版分類表 (1555-89)⁸⁵ 出版点数合計：2063 点

I. 宗教書 699 点

1. 聖書 102 点 ※聖書の抄録 (特に詩篇や福音書の抄録) は、典礼書 (I.3) も参照
 - A. 聖書 (旧約・新約) : 17 点 (多言語聖書 3・羅 12・蘭 1・仏 1)
 - B. 旧約聖書 : 7 点 (ヘブライ 6・羅 1)
 - C. 旧約聖書 (モーセ五書) : 1 点 (ヘブライ 1)
 - D. 旧約聖書 (詩篇) : 17 点 (ヘブライ 4・希 4・羅 7・仏 1・羅 1)
 - E. 旧約聖書 (箴言) : 6 点 (ヘブライ 3・羅 3)
 - F. 旧約聖書 (伝道の書) : 2 点 (ヘブライ 1・仏 1)
 - G. 旧約聖書 (預言の書) : 1 点 (ヘブライ 1)
 - H. 旧約聖書 (聖書外典) : 9 点 (希 3・蘭 5・仏 1)
 - I. 新約聖書 : 14 点 (多言語聖書 1・シリア 2・希 2・羅 4・蘭 3・仏 2)
 - J. 用語索引 : 3 点
 - K. 聖書テキスト (注釈・意訳) : 25 点
2. 初期キリスト教著作家・教父の著作 (古代・中世) : 52 点
3. 典礼書 (教会暦も含む) : 200 点

⁸⁵ Plantin Press., VI, pp.2597-2673.

4. 宗教論文：316 点
5. 教会による布告、宗教に関する法律・勅令、宗教関連：29 点

II. 法律分野 227 点 (教会法を除く)

1. 法文書：7 点
2. 注解書、研究書 (ローマ法に関するものも含む)：26 点
3. 勅令・布告：194 点

III. 科学書 147 点

1. 数学 (幾何学、会計を含む)：8 点
2. 天文学・占星術 (暦や宗教的な性格のものも含む。宇宙形状論は IV. 地理学を参照)：33 点
3. 自然科学：28 点
4. 植物学：22 点
5. 医学 (化学を含む)：55 点
6. 工学：1 点

IV. 地理学 (宇宙形状論、旅行書を含む) 56 点

V. 歴史書 174 点 (時事ニュース、パンフレットも含む)

1. 史書：34 点
2. 時事 (パンフレットも含む)：140 点

VI. 学校用書籍 (カリキュラム) 5 点

VII. 文法・辞書 (会話練習帳や綴り方を含む)：142 点

VIII. 人文科学書：118 点

IX. 人文書 391 点

1. 古典著者 (キリスト教に関する著書は除く)：240 点
2. 古典著者に関する注釈、古代研究：117 点
3. 新ラテン文学：34 点

X. 文学 (蘭語・仏語などによるもの) 26 点

XI. 寓話 16 点

XII. エンブレム本 37 点

XIII. 音楽本 (聖歌等) 12 点

XIV. プラントン工房 13 点

1. 書籍カタログ：7 点
2. 規定：5 点
3. 活字見本：1 点